
竜の世界にとりっぷ！ 7

御紋

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の世界にとつづく！ 7

【Zコード】

Z7092Q

【作者名】

御紋

【あらすじ】

限られた紙面の上で限られた人へ自分だけの言葉を綴る。

それはとても素敵なことだけど、なぜか時折泣きたくなるときがあるように思います。それは私だけなのでしょうか？ ねえ、ご主人さま。【竜とりシリーズ第7弾！】引っ越した先ではまた新しいお仕事＆濃いキャラたちが。目指せ、恋愛！ 脱ファンタジー。お読み頂けると幸いです。

（前書き）

こちらは、「動物の世界にとつづふ！」作品たちと同じ世界観のもので、書かれています。詳しくは、まとめサイトさま（<http://www22.atwiki.jp/animaltrip/pages/1.html>）へどうぞ。

* 蛇の描写について嫌悪を抱かれる方は見ないほうがよいかもしれません。

* また新しい竜族限定設定ならびに（捏造）郵便設定などが生じています。ご了承ください。

以上に了解された方から、スクロールください！

拜啓 我が愛すべき師よ。

いかがお過いじでしょつか。

私のほうは些少の変化がございましたことをお知らせいたします。私がこの《動物が人へと転化する世界》へと落ちてきて、もはや一年の時間が経過いたしました。

これまでの一年間、私は龍族のリアティに庇護されて龍族の御老体がたを相手にしたエステとも湯屋の三助さんすけとも云い伝えられぬよつな仕事をしておりました。

おかげさまでその仕事つぱりはお客様に好評で私が可愛がついた「ちいさきもの」と呼ばれる子蛇ちゃんたちにも贈り物という名の玩具を供することが叶うだけの収入を会得し何不自由なく過ごすことができておりました。

ですが先日、お仕事が開店休業状態へとなることが決定いたしました。

何があつたかなどと聞かれましても私にもとんとわからないうとばかりなのです。

仔細も解らぬものをどうやって報告するつもりかとお叱りを受けそうることは重々承知ですが、龍族の長どのよりのじ命令でこのほど私は城へと移り住むことに相成りました。

ええ、お城でござります。

引越しのじ挨拶にはやはり蕎麦をお持ちするべきなのでしょうか。ですが、あいにく物知らずの私にはそのような立派なものをお前で配達してくださりそうなお店を知らないのです。

以前お世話になつた兎族のルイさんならばとも思いましたが、あちらへの連絡先は番頭さんであつたメイムさんしか御存じではあり

ませんでしたし、何よりも蕎麦を食べる風習を龍族の方々がお持ちかどうかも定かではありません。ましてや、地球世界では田立て増えてきていた蕎麦アレルギーによるショックなどをおこされても困りますし。（私はそんなときの対処法までは理解してはおりませんので）

委細全てを書き連ねるには相も変わらず文面の限りがござります。これからのお住まいにての準備もござりますので、これにて本日は書き納めとさせていただきたく存じます。

乱筆乱文なれど、あなたの孫であり、父母を失くしたあの22年間の武術をお教え下さった直弟子からの手紙ということで、大目に許していただきたいと思う所存でござります。

師のご健康と幸いを祈りつつ

敬具

佳永

そのように私に会われたのは、以前仕事を施術させていただいたファンリー様でした。

ある日お城からやつてきたのは竜の印の引っ越し相談所でした。いえ、相談というのはもう少し相手の意思を尊重するものだと思いますので違ったのかもしません。

なにしろ、引っ越しする当人である私からして寝耳に水の出来事でありましたからね。

「……あの、ファンリーさま？」

「さあ、仕事はスマートにこなすものですよ。佳永さん」

Time is Money! 時は金なりですわ！

「……はい」

どうして、300年前のアメリカの政治家の言葉をこの人が知っているんでしょう。竜族つて本気で何者なのか分からなくなる瞬間でした。

だつて、ここ異世界でしょう。

どこかの、あるいはいづれの時代かの落人おちうじんが広めたでしょうかね？

その割にはファンリーさまの発音は流れるようだったのですぐ気になりました。

しかし、若いころは旅行好きな方だったとは聞いてはいましたがまさか異世界わいせうまで行って身につけてきたわけではないでしょう。

もしもそうだったら、是非わたしも実家まで送つていただくなのですが。

「さあ、どれを持って行きますの？」

荷物の選別だけはしっかり行っていただきます！

ファンリーさまはその年齢不詳のひどがた人形の姿にて私に指示を出されました。『お輩の女性でいらっしゃるとお聞きしていましたのですが、私の眼からは化粧上手な50代の女性にしかみえません。

…何でしょうか。

ふつふつと竜族における御老体の定義についてを突っ込んで訊きたい心境になりました。

我慢しましたが。

今日のファンリーさまは龍形種の正装であるチョゴリとチマを纏つておいでます。

韓国の民族衣装ですね。

すじく似合っていますよ、ファンリーさまに。

ちなみに今日の私が身につけているものは、『シャツもどき』と

竜族の一般的な男性用下衣であるドーテイです。

『シャツもどき』は私がこちらの世界に落ちてきたときに入っていたシャツとジーンズを見たメイドさんたちが真似て作つてくださいたものです。とてもありがたいです。

『シャツ』ではなく、『シャツもどき』と呼称するのほこのシャツにはボタンが無いからです。……いいんです、羽織り代わりにしてますから。

留め具であるボタンがないかわりに、下方に伸びてついている紐で胸の下部分に縛り上げるのです。…もしかしながら、どこかの海水浴場でよく見かけたあの腰のくびれをよく主張していた水着風でしようかこれって。

腹は隠させてください。お願ひします。

その下にはチョリも着用しておりますので問題はないと信じたい思いなのですが。

チョリは竜族の一般的な女性服であるサリの下に身につけている色付きのシャツです。要は見せるインナーです、ご理解ください。…上の羽織りはともかく、チョリやドーテイへらこなら準備できますわよ?』

私の衣装を見て小首をかしげながら、ファンリーさまが話されました。

…美しいのに可愛いって反則です。ファンリーさま。

「 作っていただいた羽織りを数枚と、これくらいでいいと思
います」

手にしたのは、ブラウスもどきを4～5枚ほどと白布に包んだ大
切なモノ。

「 ……それは何が入っているのかしら?」

見させて頂いても良いかしら?」

好奇心に満ちた顔でファンリーさまが云われました。

「 ……どうぞ」

くるんでいた布を開いて見せる。

中に包まれていたのは、私がこちらの世界へと落ちてきたときに
身に着けていたブラウスとジーンズ、サンダルが一足。 それ
だけです。

「 ……貴女がこちらへ来た時のものかしらね?」

「ええ」

私の故郷のものです。

答えながら、この人はもしかして今までに落人と出逢われたこと
があるのだろうかと思う。

好奇心で尋ねたのかと最初は思つたが、包んだそれを見せた時に
どこか優しい表情を見せてくれたからだ。

おそらくは、そこに入っているだろうものを彼女は知つていたの
だろう。

どのようなものであれ、落人の住んでいた故郷のものであつと
いうことを。

部屋を振り返る。

一年住んでいた部屋の割には殺風景な部屋だとはよく言われたも
のだ。

執着するべきものを作らぬように、無意識に選
択していた結果であつたのかもしれません。

抜いていた結果であつたのかもしれません。

「力ナ」

荷物を整えた後、お世話になつたこの屋敷の方たちへ挨拶をしようと思いましたが、ファンリーさまに留められました。

『きっと皆さん、門扉へ集まつて『いるわ』

そう言されました。

仕事仲間であつたトールやレイヤ、それから、メイドのウルティカさんが抱えた籠のなかにはちいさきものの代表としてイアンくんとロッードリーくんとゴピビちゃんが連れられられていきました。

「ご主人さま」

手を握りしめて皆に今までのお礼を告げたあと、最後に声をかけてきたリアディさまに返事すると手を出せと言われました。

「……これは？」

「おまえにやつたものだ」

渡されたものはリアディさまからお借りしていた櫛でした。

おそらくは、ヨウコという名の過去の落人でありリアディさまにとつての家族であった蛇族の上位種の妻の遺したもの。

「もらえません」

このような大事なものを。

リアディさま仕事の番頭と呼べるメイムさんが、その櫛を見た瞬間にすこしだけ反応していました。

無理もないのです。

ヨウコという落人は、彼にとつては実の母であつたのですから。いかに共に育つた兄とも等しいご主人さまのすることなども、異論くらゝあるといつもののです。

「メイドさんにお渡しちゃだわ。」 彼の匂のものもあるのでしょ？

無言のままの蛇族の上位種へとそれを渡そうとしました。ですが、その手は止められました。

「アホ！」セガが俺にくれたものだ。 好きな女性が出来たら渡せと

だから、おまえに持つていて欲しい。 強く強く、抱きしめられながら。

「」の人の想いを知る。

「好き、だと？」

「ああそうだ」

そして浮かんできたのは、何といつべき感情であったのか。

「ふ…ザッケンなーーー！」

抱きしめてきたリアディさまの腕のなかに「」の腕を入れたまま大きく腕を横へと広げ、そのぐびきから逃れます。同時に、リアディさまの足の甲を力強く踏み込みました。

「お見事です」

あつけにとられた表情でこすりを見ているトールとレイヤの横で、メイドのウルティカさんが拍手をしておられました。

ああああ子蛇たちが揺れてますウルティカさん！ 危ない！！

「……行きますよ、ファンリーさまー。」

「え。……っええ」

爆笑を無理やりこらえたような表情でファンリーさまが返事をされました。

メイドさんもいつもの無表情ながらも微妙に楽しそうな気配が察せます。 面白かったんですけど、まさか。

「お世話になりました！！」

「ぺこりと最後にもう一度だけ頭を下げて、邸を後にしました。

私が足を踏み込んだ際に人の頭に頸を載せていたために、竜族の弱点である頸を強打したりアディさまが痛がっているのが見えました。 知りませんよ、自業自得とおもいなさい。

ファンリーさまが用意してくださっていた俾に乗つて、邸を後にしました。

「…………さこつこつ…………」

あははははははははは。

真横でこらえられずに笑い始めたファンリーさまのお声が風に乗つて、行く道に広がつて行きました。

私はもう知りませんよ。

本当に、もう一

俾が行く道の先は、木々に遮られてよく見えはしませんでした。

「 行つてしましましたね」

メイムが、カナの乗つた俾の去つた方向を見つめながら呟いた。
痛い。

「……ご主人さま」

「……なんだ？」

最後のチャンスと思って告白したのに、即行で振られたりアディ
はふてくされながら返事した。

「どうしてこのタイミングなんですか。

へたれ

弟のように可愛がつてきたメイムにそりがげられた。

「やがましいわ！－！」

心から、今の俺は不幸だと思える。

ぺたぺたぺた。

今日のお仕事は机デスクワーク仕事であります。

「あー、今日のお手紙はこれだけかな?」

「……午前の分だけですので。　後2回ほどは配達便が届くと思

いますよ」

ですから、出来るだけ早めに眼を通しておこてください。
のほほんとした声で確認される龍族の長殿にそう答へました。
城と呼ばれる龍族の長が住まつ場所へと住みはじめ、はや20
日が経ちます。

……やっぱり、私はお仕事をしていなことダメなようです。

ファンリーさまと共にやつてきたお城には、至れり勿べせりな環境
がそろつておりました。

「のんびりと過ごしてくだせりとかまいませんのよ」

ファンリーさまはそう云われましたが、正直に言いましょう。

「仕事をしてる方がよほどのんびりできます」

根っこが庶民の私としては、やることがあった方が心おきなくの
んびりできますと主張させていただきました。

笑い上戸なのか、ファンリーさまは爆笑したあとでお仕事を用意
してくださいました。

最初に『えられたお仕事はお城のメイドさんと同じお仕事でした。

……その後のことは思いだしたくもありません。

女子力の低い私がお裁縫や編み物や織機の扱いが出来ると思
ですか?　私に出来るのは、せいぜいお掃除しかありませんでした

よ。

「……せっかくですし、長殿の事務仕事の手伝いでもなさいます?」
ぴかぴかに磨き上げた城の廊下を見つめたあとで、ファンリーさんが私に言わされました。

「喜んで」

もはや磨く場所もなくなり暇になっていた私にはそう答えるしかなかつたのです。

連れてこられた場所では人形の竜族が一人、テーブルに突つ伏しておられました。

「…………またですか」

ため息を放つファンリーさまは諦めの言葉を発せられました。

「あれえ? ファンリーさまじゃないですかああ? ?」

どこかのほのほんとした声音で返事をしながら、顔を上げたのが竜族の長であるバルンさまそのひとでした。

「バルンさま。…………寝ないでください! !」

「みぎやあ、ぎやい! !」

「こめんなさい、起きてます! !

ファンリーさまの一喝にぴつと飛びはねて座りなおしたのが、この今のお仕事の上司である全竜族の長でした。

……大丈夫か、この一族。

「おつかれさまです」

「…御苦労さまでした」

ペコリと礼をして、男性形の竜族の方が出て行かれました。

預かつたばかりの手紙を分類します。

さまざまなサイズ、色と手触りの封がされた手紙たちです。

今までに見た手紙の中で驚いたのは、大きな水連の葉っぱに書かれていた葉書でしたでしょうか。

端が茶色くなりかけていた葉っぱの御葉書には、大きく「長おさ生きろ」と書かれてありました。

…どのような交流相手だと心から疑問に思ったことを思い出します。

「みぎやあああああああ。もついやだ！ もういやだ！ 僕は夢の世界へ行く…！」

……。

…さて、手紙の話に戻りましょうか。

長へ届けられる手紙には実に多種にわたる内容のものがあります。友人知人からの時節の挨拶、付き合いのある他種族の代表からの懸案事項のお報せ、なかには各地域に居を構えた竜族からの献上の品なども混じつていることがあります。

多くの手紙には特に目立つ標しるは付けられてはおりません。

しかし、いくつかの手紙には標が打たれています。

赤の標は『至急の閲覧と対応』を、青の標は『必須の返答を』、黄の標は『閲覧・認知』を求める文となります。

それを把握するためには封書に張り付いた蝶印を確認する必要があります。

現代の日本ではなかなかお目に書かれない蜜蠍を垂らした上に押しを施した文は、もつとも公的な文だとされています。

その蜜蠍によって固定された色のついた異物。

それが何色

であるかによって、その文の扱い方が変わるのでです。

赤色の糸や刻まれた紅葉が蠍によって固定されたものは至急の対

応を望まれている内容が書かれている』ことが決まっているため、即座に長へと届けられることになります。実際に届いたものの文面は『すいませんが、ウチの近くに遊びに来た竜族が生活道路に陣取つてゐせいで支障が……』とか『音痴な歌が一昼夜響いてて困る』とかそんな内容のものだつたかと思います。

青色の石の欠片や紺色の染糸が固定されていた場合は、赤色ほどの重要性はないものの確実な回答をする問題が……「僕も自由になりたい！世界にちらばる美味しいもの食べ放題の旅にでたい！」……問題が、書かれていることが多いため赤の文の次の優先順位のものとなります。

内容もまた長だけですぐに可決できるものとも限らず、赤と青の文が届いたときには竜族の老の名を持つ竜族の上位種たちに意見を聞いたりするようです。

結果、『ああ、グラナンだろ。あいつまた肥えたのか』とか『……誰か、ルイザちょっと捕まえてこい。竜族の威厳が……』などといった結論や方針がそうやって決まります。

黄色の葉の欠片や貝殻を碎いたものが固定されていた場合は、決定事項としての文ですので基本的には返信は必須ではありません。ただし、実際に届いているのかを把握しあうために返信をするのがこの部屋の主たちのやり方となつているようです。ちなみに、最近こちらで把握した黄の文は『荷の中身の確認の徹底と運搬方法の見直しを図ることになった。割れ物は今後急ぎでは取り扱わないから余裕を持つて依頼してくれ！』という馬族の長アカンザさんからのものでした。

他にも色のついた文にはいくつかの意味がありまして、黒の文は『弔意』を示し、黄金の文は『慶事』を示し、緑の文は『敬意と親愛』を……。

「だから、後は任せた！」

「よひしぐ、佳永くん！」

「待ちなさい！」

逃走しようとした竜族の長殿の足についた紐をぐいっと引つぱります。

「……なあつ……」

がたーん！…………リン。

大きな音がこの執務室の中に響きました。

咄嗟に持ち上げた分類済の手紙たちが乱雑に混じらなかつたことに安堵いたしました。

「いつ、でえええええ」

何、この紐！ いつのまにこんなのがつた！！？

勢いよく床に額と鼻をぶつけた中年と呼ぶには幼い行動をお取り下さる長 バランさまが元気に叫んでおりました。

「どうして私に任せんですか。

長さま？」

「……や、やああ。佳永くん。今日も一つに結んだお下げがとてもかかかかかわいいね！」

焦つて褒められても、何も嬉しくはありません。

…長さまの人形は、中肉中背。紺色の髪に黄色の瞳。 見た目をあわせていつのであれば、40代に乗つかつたか否かといつ程度の年齢に見えます。

群青色の上衣に白のドーティを身に付けたバランさまの放りあげられた左足には、私が掴んでいる編み紐の端が括りつけられています。

「敵前逃亡は大きな重罪ですよ。 お仕事をしてください」

「佳永くん！ 後生です！ 旅にでさせてください！ 旅に……」

僕を世界の美味しいもの達が待つてゐるんです！

暴れるたびに逆に紐が絡まつていいくことも理解せずに、駄々をこねる中年一名。 マダオですか。

「別に、私はそれでもまったく支障はありませんけれども、ぱつりと言つた本音に、長様の顔が輝くのが見えました。しかし。

「…………ですが、ミランダさまがどう反応するかまでは知りませ

んよ」

呴いた瞬間に、鳴った鈴の音を聞きつけて部屋へと駆けこんできた方のお声が聴こえました。

「逃げようとしたのは、じつ・じつ・のつ・困った顔さまかしら?」

「ママよりも熱く、絶対零度よりも冷たいお声がありました。

「//ハンドサム」

「「めんなさい! 奥さま……」

しつかりと頭を下げて謝罪するバルン様を見つめつづつのです。
「仲のいい御夫婦です」と、と。

暖かなお茶を注ぎました。

蛇の群れにあるという上芸村の作品「しきトレイ・ポット」で蒸らした紅茶を三人分。 バラン様と、その第一夫人である//ハンドサマ、それから私の分です。

書類仕事の小休止として用意したのは、紅茶と…クッキーです。

まあ、蛇の里で田圃してゐる蛇族がいるくらいですし、じつか

で小麦つくつてる一族が居てもおかしくないよねきっと。

「己の精神安定のために納得することを選んだのは私です。ええ、放つておいてください。

「うま！ バカうまい！」

「コックを呼べ！ 優めてつかわす！

「……バランさま、クッキーの食べカスは書類に落とさないでください」

「……全ての書を写し作業させるぞ、おい。

目線でつい長さまを脅してしまいましたが、気にする方はいらっしゃいませんでしたばん。

「佳永さん。……とてもいい案ですわ」

78時間の徹夜での書き映し（手がき）作業くらいは余裕でしてくださる筈ですものね、田那さまなら。

「己の夫君にして竜族の長であるバランさまへの脅（げふん）……ご注意して微笑んでくださる奥さまは、素敵なスバルタ妻でした。……たまに、バランさまの口に負けてお一人の惚気会話がはじまる」と見えなければいい仕事場なんですよねっこも。

無糖の紅茶に口をつけつつ、ミランダさまへ会釈を返した私でした。

「お仕事には慣れましたか？」
のほほん。

「……ええ、おかげさまで」

仕事の大体の流れでしたら、なんとか慣れました。……私が慣れていらないのはそこじゃないんです。

「確認したいのですが。……バランさまには性格が二つか三つほどござりますか？」

失礼かとも思いつつ、気になつてたまらない」とでしたので確認させていただきました。

「そうですねえ、……基本人格と机仕事用人格と竜族族長用人格と
パニック用人格で、最低4つはあるんじゃないでしょうかねえ」
僕にもよくわからないんですけどもねえ。

ほにやりと笑つて長殿は言われました。

先ほどの小休止によつてパニック用人格（別名：仕事のストレス重複による逃走切望人格）はどうやらバラン様の精神世界の奥底へと引き込んでいつたようです。

愛のなせる業か、ミランダさまがお仕事をある程度仕分けしていくつてくださつたことも原因の一つだとは思うのですが。（ちなみにミランダさまはその後すぐに自室へと御戻りになられました。彼女は現在育児に忙しいのです）

「……おつかれさまです」

直視して云えなかつたのは私です。　　あまりにも、バランさまが憐れすぎました。

なにしろ、竜族の基本は何度も言いますが、個人過ぎです。
失礼、間違えました。　　個人主義です。

そう、個人主義！

……どんだけフリーダムだと思いますか、本当にもう。……涙がちょちょ切れます。

先ほどの手紙の文例を思い出していただけと解る氣もいたしますが、竜族は基本的には里に住む者もおおいのですが、蛇族ほどではないにしても旅が好きな連中です。

自前の飛行能力で好きな場所を探し求めて、別荘あるいは秘密基地感覚で他の群れの領域でこつそり暮らしてゐる輩も多いのです。……良識ある竜族であれば、多くは人形姿にてすごされるため、そんなにも問題にはなりません。

ですが、　　たまに。

ちょっと困つたチャンが現れるのですよ。困つたチャンが、具体的にいうのでしたら『酒を飲んで気持ちよく入眠した際にうつかりと本態である竜形に戻つてしまい、家屋を損害あるいは道路

封鎖『

頻度は多いトラブル例ですが、大体は族長のところにはこないで本人が収集つけるので無問題。ごねるようなことがあれば、こちらへお手紙が届きますけどもね。（そして、お郷へ回収され説教されるという流れ）

次に多いのは、『爆音被害』 歌の好きな竜族に多いのですが、気持ちよく竜形で歌つたら思つたよりも周囲の群れに響き渡つて怯えられたり、子供が泣いたりしたとかいうものです。これもよくあるんですが、基本的には本竜が注意するしかありません。申し立てられた場合は、素直に反省して他の場所へ移動しているようです。鼠族さんとかは怯えてしまつてなかなか本人に苦情を申し立ててくださいないので、見かねた旅人や他種族の方を介してこっちに連絡されます。 勇気だしていいんですよ、長！！（応援） 稀にあるのが、コレクター連中のトラブルです。…これが一番困ります。

ブラシ集めの旅（各種族のもふもふ収集）や、名本写本の旅（猿族の図書館御愛用）などいろいろと具合はかわるのですが、……度が超えると迷惑になるんです。ええ。

たとえば、『田参で毛を下さいとか申し込まれててツライ』などとある族長から文が来たり、猿族から『図書館での写本つくりはおやめくださいと何度も言つてもききません』などとこつ苦情が来たり。

……趣味もいいけど、他人に迷惑かけないでください。ほんつと。

毎日届くフリーダムな竜たちのトラブル報告とそれへの対応に追われる長さまが可哀想です。

でも、逃す気はありませんが。

ファンリーさまとチェイサさまに了解をもらい用意して頂いた蜘蛛の糸を合わせ紡いだという繩を、郵便が届く前になると長の足に括りつけるのが私の最近の仕事なのです。

『長の雑用兼逃走防止のお仕事、お願ひしますわね。佳永さん』

『ほほつ、やすがは落人どの。

良いお仕事を期待しておるが』

笑顔で私に言つて来た御老体2名に、長への愛はどうあるのかと突つ込むのは残念ながら私の仕事の範疇の外にあります。自力で抗議してくださいね、バルーンさま。

「お毎寝ですか？」

ひょこんと訪れたのは城の保育室です。

どっちかとこいつと

子供部屋でしょかね？

「カナ、さん」

「…ええ。ようやく眠つてくださいました」

竜族の長バルーンさまの子供たち付きのメイドであるコインさんとアライアさんが、そこには居らつしゃいました。

「お仕事は終わりましたの？」

首をかしげたのはコインさんです。

龍形種であるコインさんは竜族のリアティさまに保護されていました時にお会いしたのが初めてでしたが、あの頃はまさかこのようになるとは思つてはいませんでした。

ファンリーさまにお仕えしているとお聞きはしていましたが、まさかお城勤めをしているとは思つてもいなかつたのです。

竜族の長の子供たちの教育係であるファンリーさまに、『部下として』お仕えしているという意味だったのですね。勘違いしていました。

「……長さまは今日は調子がいいのかしら？」

お茶の用意をしながら声をかけてくれたのはアライアさんです。竜形種だとお聞きした彼女の人形は、サリガよく似合つ天然パーマの栗色の髪の美女でした。

仕草の端に妖艶なフェロモンをにおわせるお姉さんです。

：情操教育的にありなんでしょうか？

昨今の教育方針の是正について、私はよく認識していないのですけれども。

「はい。……今日は早々にお仕事が終わったとのことでして、ミランダさまとイオさまのもとへと戻られました」

満面の笑みで駆けて行つた長の後ろ姿を思い出します。走るときは若干内股ぎみなんですね、バルンさま。……男の人なら内股走りはやりにくいと思うのですが。

ちなみに、イオさまとはバルンさまの第一夫人の名前です。人見知りの気がある方らしく、私はまだお会いしたことないです。第一夫人であるミランダさまとの仲は良いらしく、6歳だというイオさまのお子様をお一人そろつてお育てしているらしいです。病弱に生まれついた第二子につきつきりだとも聞いています。

「うわあ。珍しい」

途中で逃げ出さなかつたんだ、バルンさま。

「……たすがはファンリーさまの」推薦。素晴らしい手腕ですね、力ナさんの手綱さばきは

「ははは……」

：感心されてしまいました。

個人的には、豹族に保護されている落人のリナさんの手腕の方が優れていると私自身は常々思うのですけども。よければお姉さまと呼ばせてください。

尊敬する女性たちが世のなかには溢れすぎて困ると思こまや。

「いえ、幸せですけども。

「……殿トはぐつすりですか？」

「つずくつずと手が疼くのです。

【癒しを、癒しを私に下せ。】

「……あちらに」

「起じしちゃイヤですよ、カナさん」

私の中毒患者の「」とき視線の落ち方のなさに許可があつました。
ありがとうございます！――！

……ほん。

「つづかつと怪しげな気配を子供たちに『えではいけませんの』で、
自重するために息を整えました。

……大人のふりって、たまにつらこんですよね。

起毛の少ない絨毯に、麻布でつくりたクッショングーつ。
その上に転がっているのが、竜族のちいさなもの。

仔竜です。

【むわや】

いわんと転がったマーマムな竜形の色は田色でした。
まだマーマムな背中のトサカ……じゃなくてたてがみには真っ赤な色
がのつかりっています。

彼こそが、バルーンをまの三男坊くん。……幼名ガ プくんです。

まだまだ眠ると竜形に戻ってしまう彼は、私の現癒しといえまし
ょ。以前の癒しであつたイアンくんにも会いたいのですが、遠く
に離れてしまったので会えないのです。哀しいです。

「……」

つん。

【むわや】

再びころんと転がりました。

可愛い。

つん。

ころん。

つん。

ころん。

【むぎやあああん】

むくりと、いきなりガ プくんが顔を上体を上げて座りました。

瞳はいまだ虚ろなままです。

「……ガ プくん、まだ寝てもいいんですよ。

おやすみな

れい」

なでなで。

おでこを軽く撫でながら、掌全体と指を使ってガ プくんの瞼を閉じさせました。

【むぎや……おにやすみなしゃい】

こりん。

ガ プくんは素直に前へと転がりました。

ころんころんぼてん。

頷いた拍子に、頭の重みで前方へと一回転したのはとても愛らしいです。

まだまだ小さなガ プくんは成体の竜と違つて頭の大きさと身体のサイズが不安定なのですぐ転がりやすいのです。 なんだ、この可愛い生き物。

心から愛でる私でした。

【むぎやす】

私の胸で受け止めたガ プくんの鱗はぴかぴかの煌めきでした。完璧です。

「ガ プさんは将来大物になると想つの、私

「私もよ」

かりかりとクッキーを噛んで呑いたコインセセミルク紅茶を混ぜながらアライアさんが同意していたことは、握り拳で歓びを溢れさせていた私には知る由もありませんでした。

「本当に?」
「ええ。このみづて手に導かれるみづてして動くと意外と動きはスマーズにいくものなのですよ」
「腰じやなくて?」
「腰も人形での動き方には重要な部位ではあります。手もまた大事なんですよ?」
「手引き…ですか?」
「そうですね。そう言つてもいいと思ひますよ」
「うふふ。なんだか悪いことしてるとみたいたいね」
「ふむ。」
「面白い」

本日は、お茶会といつも講師会へとなり果てたかのよつでした。生徒はバルンセセとコインさんとアライアさんとファンリーさんとチハイサさま。 それから、バルンセセのお子様である

長男トラオム・バルンさまに、三男であるガ・ブ・バルンさま。

次男は欠席でした。

そして、講師はわたし岩倉佳永。

つたかを是非誰かにお聞きしたいです。50文字以内で説明してください。はい、初め！！

脳内では怒りの抜き打ちテストが始まつていましたが回答者はいませんでした。

最初はお子様たちとのお遊びにすぎなかつたことだけは覚えてい
るのです。ええ。

バルンさまの長男であるトラオムさまは御年16歳の若者です。
まだまだ若いとはいえども、竜形の制御を覚えたという程度のもの
で、まだまだ人形での身体の扱い方が難しいのだという話をしてい
たのです。（ちなみに、わたしとトラオムさまの関係は友人でもな
く同僚でもなく、ガ・ブくんを愛でようという趣味をともにすると
いうだけのものであります）

「転び過ぎてドーテイ繕わせてぱっかりでさあ、ごめんなあ。ユイ
ン、アライア」

申し訳なさそうに「トラオムさまは、とてもよこ好男子である
と私は即認定しました。

「……歩幅はどれくらいで歩かれていますか？ ふだん」

もちろん、人形のときですよ？

そして、自ら彼にそのように問い合わせたことも覚えてているのです。

「えーっと。……」んなかんじ

ちょこちょこちょこちょこ。

歩いて見せるトラオムさまのお姿は、まるで鳥の雛のよつでした。

バルンス、悪っ！！

「気を付け！！！前を見つめて、背筋を伸ばして、軽く顎を引く！

！！！」

「はい！……」

びし！

軍隊の号令の「」とく発した命令にしつかり反応した好男子は、

つふ。

……ここにも、喜んで女子につき従いそうな遺伝子を発見してしまいましたよ。本気で何者ですか、竜族。へたれ遺伝子の末裔ですかそうなのですか。

「 そのまま、軽く両足を肩幅ほどに開いてください。体の重心は臍の下に」

中心に体軸を定めた後に息を大きく吸いながら両手を上にまつすぐ伸ばし、そのまま真下へと腕を降ろす。 これが基本姿勢であるべきでしょ？？

「 じう？ カナ？」

なんか安定した気がする。

トライオムさまが言われるままに基本姿勢をとつて、尋ねられました。

竜族は生れた頃から人形になれるというのは真ですが、やはり本来の姿である竜形にばかり好んでなつてしまつるのは仕方がないことです。おかげで10代の頃（分別がつくようになり、人化した社会生活のなんたるかを考えだす頃）には、人形をとることをマスターしようと練習しはじめるのだというのは、よくある話です。トライオムさまも慣れない人形の扱いに苦労している途中らしく、歩いて走つて踊つて転ぶの流れを経験しているらしいです。

ですが、こちらも古武術などというより洗練された人身の扱い方を修めた身としては突つ込まずにもおられず口を出してしまつたわけです。 余計な御世話でしたら申し訳ないのですが…。

「 で、次どうすんの？ カナ！！」

「 ……」

おせつかいすぎたかと一人で反省していたといふ、ノリノリの笑顔でトライオムさまがこちらを見つめておりました。

指示されたことが新鮮で楽しかつたようですが、意外に。

……素直な若者が眩しいです。

「常に軸足と上体のバランスを把握してください

い。安定は維持と支持には最適ですが、勢い（スピード）と重心の移動を考える場合には不安定を利用する体感覚を養う必要があります」

上体下体のバランスと重心の移動保持。

古武術を考える上での大切な要素です。

思いこみなどを利用するのも特徴的ではありますけども。狐の手とかね。

安定は不安定に負けることがあるということをよく知っていた先人の知恵の塊です。

西洋においての武術と違うのは左右に分けてどちらかのではなく、上下で認識しているところな気もします。

四つ足（前肢・後肢）に近いような感触なので、より獣的な感覚を重視して身体への負担を少なくしようとしたらどちらかのことが出来ると思います。

「ふむふむ」

「たとえば、手引きでの遊びで感覚を養うのも手でしょう」

「どんなふうに？」

「片手をお互いに繋ぎ、それを引きあいます。お互いに足を動かさないようにルールを作つたうえですると上体の扱い方の感覚を養えます」

質問に答えて、トラオムさまの手をつなぎ実演しました。

「これを巧くこなすためには、人体の隙間やひねりを利用する必要があります。逆に望ましくないことは、膝の関節や股関節をロックしてしまうことでしょう。安定のためであればそれは良い方法ですがこの遊びはむしろ不安定さを使いこなすためのものです。関節は軽くゆとりをもたせてあげたうえで行つべきだと思います」

「なるほど」

「なかなか」

口でいうのはたやすいですが、それを身体で実感出来るようになるのは……個人差があるだろうなあ。

教える側も己のやつてることを言葉で抽出しているだけなので、なかなか直接理解に及ぶわけでもないだろうし。

それでも言葉をつくして伝えるのは、教える側の仕事だ。10を述べて、1を掴むきっかけになつてくれればいいと思う。それだけが他人でしかない私たちの出来る教え方だと思うから。若さのなすものなのか、何度かふらつきながらもトラオムさまもこの遊びの楽しみ方を理解されたようでした。汗ばみながら笑つております。

「…………」

「うんうん」

「面白そうねえ」

「ほくもやるうつ」

部屋にいる人数が増えていました。

「…………」いつのまに見学者がふえたのでしょうか？ チェイ

サさま、ファンリーさま？」

「うむ？ ワシは面白いことには喜んでくいつく人生を推進しておるだけですぞ？」

飄々と告げたのは、竜族の大老であるチエイサさま。

「あら？ 育児室は私の仕事場でもありますもの。仲間はず

れにしちゃイヤですね」

「ここにこと告げたのは、竜族の長の一族の傳（教育係）であるファンリーさま。

「ぼくもにい様と遊びたいです！」

一生懸命に手を上げたのは先ほどまでのお昼寝から目覚めたらし

いガ プさまでした。

これからトラオムさまと私の会話を聞いていたはずのメイドであるユインさんとアライアさんはとこうど。

すっかり綺麗に繕われたドーティをトライオムが机に返却していました。

騎士は結局コインちゃんとマイアちゃんの髪飾りだった
のでしょうか。

集まつた竜族の上位種相手に遊びを教えること小一時間。
喜んでもらつたことは嬉しいですが、まさか明日も遊んでねなど
とガ プセモヤトヲオムさまに言われる羽田にならうとは思つては
いませんでした。

……なぜこうなつたのでしょ？

「佳永さんにお届けモノがあつたのよ」

実はそれで此処まで来たところだった。

少し汗ばんだ髪に持ち歩いている櫛を通して、声をかけてきたのはファンリーをまでした。

もちろん、周囲にはすでに男性たちはおらず女性たちしかおりはしませんでした。

「……これは誰からの?」

「もちろん」

リ坊からよ?

手渡された手紙の裏には、リアディと一筆されていました。色は、緑。

「ほんとうに、リアディさまは……」

バカですねえ。

眩いたあとで涙が零れ落ちたのは、私のどんな感情のあらわれであつたのでしょうか?

「……ねえ、佳永さん。あなたは、あの子が嫌いかしり?」

笑んで尋ねた、リアディさまの名付け親には嘘などつけむはずもない。

「嫌いになることが出来たなら、私はもっと楽だったはずなんですよ、ファンリーさま」

あれほどに、優しくしてくれた獣は。あれほどに、厳しく対応してしまった獣は。今でも、己の思いを緑の文で贈る。赤でもない、青でもない色で。

私の答えはなくともただ愛していると叫ばるためだけに。

彼は文を結ぶ。

敬意と親愛を示す、優しい緑の文で。

私はその手紙を受け取っただけで終わらせるつもりでいる。
開封することはきつとない。

ただただ、家族のもとへと帰るためだけに。
愛など要らぬ、恋など要らぬ。
信頼と親愛だけがあればいいから。
だから。

「私のことなど忘れてほしいのですよ」

リアティさまには。

この『動物が人へと転化する世界』では。

片側通行の想いだけが、文となつて滯つて
いる。

了

(後書き)

スクロールおつかれさまです！→
よつやへ言つてくれたね、28歳！！（泣）

今回はキャラも増えました。郵便設定も勝手に作りました。
他の群れさんでは解りませんが、この竜とりではこのような設定
になつているということでおろしくおねがいいいたします！→
古武術につきましての考察は古武術介護の先駆者である岡田慎一
郎さんの著書などを参考にさせていただいたうえでの私の解釈によ
るものです。ちよつとこの解釈間違つてる気がするよ…と思われる
方がいらっしゃいましたら、是非ご指摘ご指導おろしくおねがいい
たします！

兎・馬・猿・豹の一族設定より一部出演していただきました。ご
容赦ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7092q/>

竜の世界にとりっぷ！ 7

2011年2月19日15時17分発行